

芭蕉元祿事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成三十年七月度 入選句（投稿総数三千五百三十句・一般投句数七百七句）

特選

選者 名和 永山

裏木戸を引けば入梅の重さかな

養老郡養老町

田中 秀草

「おや」と思われた人がいるかと思いますが、中八「引けば入梅の」は「ひけばつりりの」と読みます。「入梅」は「つゆいり」を短く「つりり」と読み替えます。俳句ではこうした読み替えがよくあります。韻を大切にするためです。

さて、この句は「梅雨の湿気の多さ」によつて「裏木戸」が重くなつたと、実感を詠んでいます。同時に、梅雨に入つて「気が重くなる」ことも同時に詠まれているのでしよう。実際に、梅雨入りと聞くと、じめじめして心晴れないのが一般的ですね。

「入梅の重さ」の措辞が生きていますね。

余り苗ベンチ温む球児たち

大垣市

久保田 悟義

「余り苗」は、田植えの終わった田の隅に固めて置かれています。これは、ある程度苗が生長した後、育っていないところに補足するために自分の出番を待っているのです。

「余り苗」といつても決して役に立たないものではないのです。また同じようにベンチを温めている選手達も、自分の出番を待っているのです。スポーツの補欠選手は「リザーブ」といつて、重要な役目を持っているのです。ちょうど「余り苗」のように。

夏座敷の風とおる道まくら置く

東京都狛江市

椎野 一恵

「座敷」は広々として、客間にもなります。特に夏は、お客様へおもてなしをするための部屋ですから、風通しの良い場所でもあるのです。その座敷に「まくら」を置く。お客様がいない時には、涼むために、また、体を休めるために、風の通る道にまくらを置くのです。

「夏座敷の」の上五は、六音になっていますが、中七の「風とおる道」で切れますから、ここでは「の」をつかつて「字余り」になつても繋ぐべきなのです。「夏座敷」としてしまつと、スムーズに「韻」が流れません。

秀逸

紫陽花や嫁いだ土地に染まりけり

大垣市

吉田 てるみ

手毬花謎を包みし重さかな

養老郡養老町

山田 順子

更衣膝小僧にもきづのあと

不破郡垂井町

中西 弘子

三成の本陣居城梅雨の城

愛知県岡崎市

荻野 豊一

夏蝶のワルツでもタンゴでもなく

不破郡垂井町

北村 廣美

飲み干してラムネの瓶の音澄めり

大垣市

田口 貞善

挨拶に合わせて傾ぐ白日傘

揖斐郡池田町

木塚 しょう

蜜豆や取るに足りない愚痴を聞く

兵庫県神戸市

岸下 庄二

青田波見るや大地の息吹きかな

三重県四日市市

藤田 勝民

火蛾むくろ夜べのひと言ご破算に

大阪府堺市

椋本 望生

入選

たとう紙に薄き母の字合歡の花	岐阜市	小湊	順子
色褪せし夏のれん日々恙なく	岐阜市	伊藤	瑞実
雨上がり植田は夕陽抱きおり	安八郡神戸町	大槻	恭子
南風吹く海に会いたく旅に出る	大垣市	北村	陽子
ホタルとぶ水都の神秘水うまし	羽島市	伊藤	みさの
嫁欲しい美醜を問わずひき蛙	大垣市	宮上	美濃留
俎板にどんと落ち着く西瓜切る	揖斐郡池田町	木塚	しょう
万緑を抜き出て城の聳え立つ	大垣市	末守	節子
昨夜の雨粒まだ残る濃あぢさる	海津市	横井	美圭
クレーン車雲の峰より荷を下ろす	養老郡養老町	田中	紫香

入選

麦扱けり一番風呂に父の歌	安八郡輪之内町	野村	照子
庭石に母似の影や梅を干す	大垣市	佐竹	露子
登城坂構えて居りぬ女郎蜘蛛	大垣市	棚橋	みさを
訪ふ人のいよいよ静か苔の花	岐阜市	小島	恵子
すずしさや青に波頭の螺鈿散る	岐阜市	木田	由美
思春期の子の黙深し走り梅雨	大垣市	日比	昌子
ふたりの影踏んでも消えぬ盆の月	海津市	水谷	勲一
休みたき時は休むや蝸牛	愛知県岡崎市	西村	愛美
父の手を離るる新婦新樹光	大垣市	片山	洋紅
翻意して四葩縁より青みけり	岐阜市	堀江	美州

選者吟

生きているものの試練や大暑の日

永山